第 14 回 Asia Travelling Fellowship： 韓国・マレーシア訪問記

14th Asia Travelling Fellowship at Seoul and Malaysia

大江　慎[1] 岩田　玲[2]
1　　浜松医科大学　長寿運動器疾患教育研究講座
2　　北海道大学　転移性骨腫瘍予防治療学分野

Keywords: hospitality, Seoul, Kuala Lumpur, indirect decompression, adolescent idiopathic scoliosis, global balance

【はじめに】

我々は韓国のソウル大学病院(Seoul National University Hospital）（2019/8/26-31）およびマレーシアのマラヤ大学病院(2019/11/17-22)を第 14 回 Asia Traveling Fellowship で訪問したので報告いたします。

【韓国・ソウル大学】

2019 年 8 月 26 日-8 月 31 日まで韓国のソウル国立大学を訪問した。1946 年より続く歴史ある大学病院で 1878 床もある日本でも見られない大病院であった。訪問中に脊椎外科チームの科長である Chon Kee Li 教授が定年退職され今後は Boon-Soon Chang 教授に引き継がれるという記念すべき日があった。脊椎外科チームの主要な先生は 3 人で、Boon-Soon Chang 教授が脊柱変形と髄内腫瘍の担当、Hyoungmin Kim 先生が頸椎、Sam-Yoel Chang 先生が小児脊柱変形といったように分業していた。その理由として、それぞれが専門性を深くもつというスタイルを重要視しているとのことであった。脊椎手術は年間 700 件もあり、脊髄髄内腫瘍手術も行われていた。特に興味深かったのは、日本ではまだ普及されていない L5/S の LIF を見られたことである。韓国では最近 Minimum invasive surgery (MIS)が盛んであり、ソウル大学でも変形や脊柱管狭窄症も含めて 2012 年 8 月から 2018 年 12 月までの間に 424 例の LIF が行われているとのことであった。そのため、手術技術は非常に洗練されていて非常に深い L5/S1 の椎間板へのアプローチでも容易に見える程のものであった。また、訪問中非常にお忙しい中多くの歓迎会を行って頂き、最終日である土曜日は休日にも関わらず Bukhansan 国立公園への登山へお招きいただいた。日本でも登山経験はほとんどなかったが、登山というものが本当に楽しく、気持ちいいものであることも教えていただき忘れられない思い出となった。

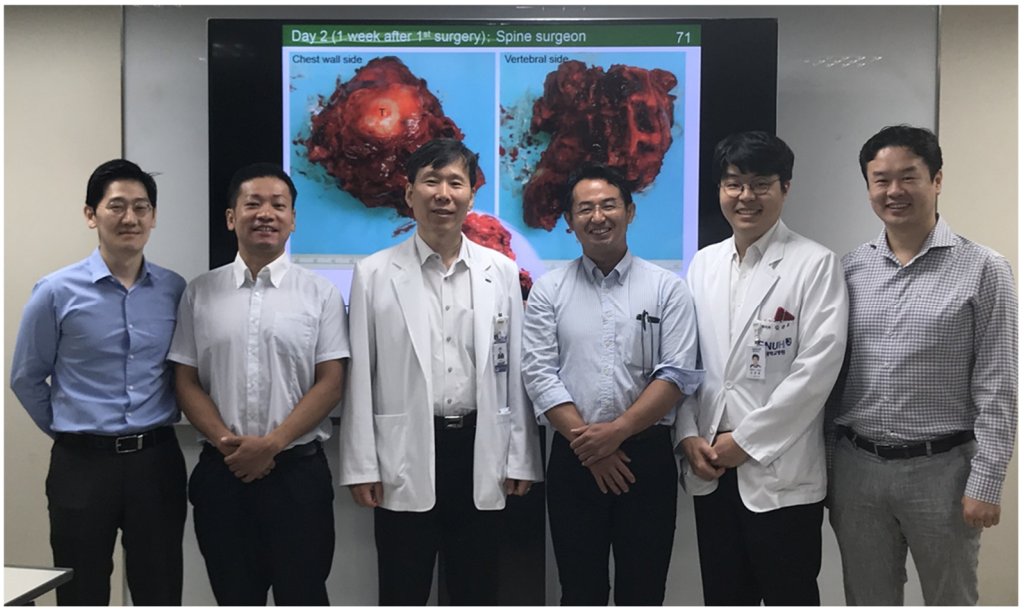

図１．ソウル大学の脊椎グループスタッフ
左から Prof. Sam-Yoel Chang, 大江, Prof. Boon-Soon Chang, 岩田, Dr. Junho Kim, Prof. Hyoungmin Kim.

【マレーシア・マラヤ大学】
2019 年 11 月 17 日-11 月 22 日にマレーシアのマラヤ大学を訪問させて頂きました。Kwan 教授、Chris 先生、Chiu 先生、Chuo 先生の 4 人と浜松医大の三原先生が 1 年の期限付きでスタッフとして診療されていました。年間約 200 件側弯症手術を行う同病院では、主として 5 件の特発性側弯症手術を中心に学びました。その中には Lenke 分類 type 1AR, 2 および Lenke type 4 といったバランスを取りづらいカーブが含まれていました。手術は二人の術者が左右同時に展開とスクリューの刺入を行い、特に近位胸椎カーブの矯正の鍵となる第 2 胸椎右側椎弓根または椎弓根外スクリュー挿入を洗練された手術手技で行われていました。主胸椎カーブの矯正にこだわらず自然矯正を得難しい第 1 胸椎(T1)水平化のために、主胸椎カーブの突側に敢えて伸延力を加えて上位固定椎の角度調節を行って T1 水平化を達成されていました。固定最下端椎もバランスが崩れないように、かつ非固定腰椎にとって生理的な動きが残存するように、固定確度を定めていました。その綿密に計算された固定終椎の角度を達成しながらも 1 件あたり 1 時間半から 2 時間半で少量の出血量で手術を終えていました。手術前治療計画は脚長差の計測から始まり、骨盤傾斜に配慮し、Bending Film を用いて上下固定終椎傾斜について緻密に計算されていました。翌日撮影された全脊柱 X 線写真でその完成度の高さには驚かされました。これらの手術手技はすでに論文で報告され、世界的に洗練された側弯症の施設であることを改めて実感しました。インプラントの実費がかかる保険制度のため椎弓根スクリューは必要最小本数で行われていました。一般の保険で行われる外来診療ではレジデントからスタッフ総出で診療に当たり、治療が難しい

特発性側弯症以外の症例も見せて頂き医療水準の高さを実感しました。仕事を終えると我々は心温かいおもてなしを受けましたが、果たしてここまでのおもてなしを勉強に来られた見学に来られた方にできたのだろうかと考えさせられました。非常に有意義な経験となりました。

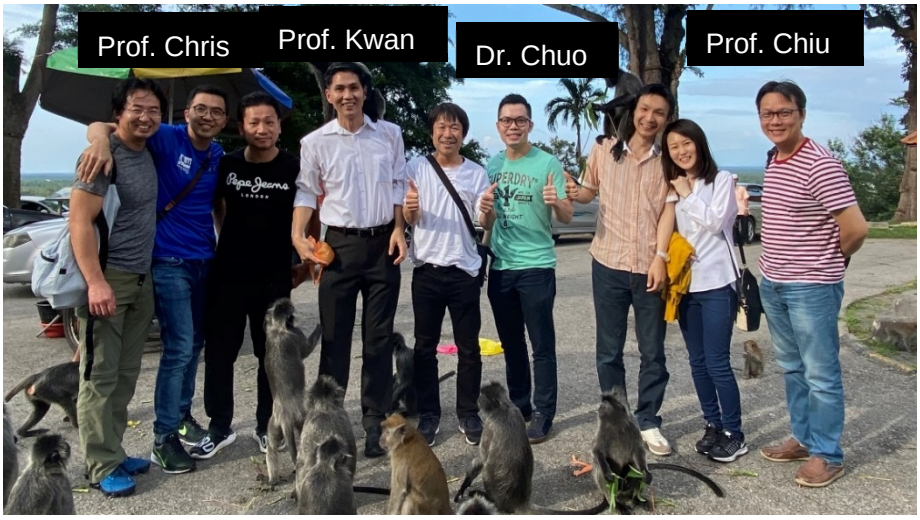

図 2　マラヤ大学のスタッフと左から 1 番目が岩田、同 3 番目大江。

【まとめ】

ソウル大学病院もマラヤ大学病院も日本で得られる経験を超えた体験を得ることができました。このような非常に有意義なフェローシップを受けることができたのは、日本脊椎脊髄病学会の国際委員会をはじめ、諸先輩方のご尽力の賜物です。関係各位に感謝致します。